

# 論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 乙	第 号	論文提出者名	島中（齋藤）瑞季
論文審査 委員氏名	主査 嶋崎義浩 副査 三谷章雄 有地榮一郎			
論文題名	口腔保健・歯科医療による口腔および全身の健康増進効果			

インターネットの利用による公表用

我が国では、出生率の低下や平均寿命の延伸による人口の急速な高齢化により、医療や介護を中心とした社会保障関係費の増大が重大な社会問題となっている。そのため、高齢期まで健康的な生活を送れるよう健康寿命の延伸が求められている。近年、口腔の健康が全身の健康と密接に関連していることが示されていることから、より健康的な社会を目指すうえで国民の口腔保健の向上を目指そうとすることは重要な視点である。

本論文は、大規模集団の疫学データをもとに様々な統計解析手法により分析を行った7つの基盤論文から構成されており、口腔保健・歯科医療が口腔の健康のみならず全身の健康増進に対しても効果的であることをさまざまな側面から総合的に検証するという目的を明確に示している。

研究1は、高齢者における歯科受診状況と歯数との関連を多項ロジスティック回帰分析および重回帰分析により検討し、歯周治療のための歯科受診が多数歯の残存と関連していることを示している。歯科受診と歯数との関連は多くの研究により報告されているが、本研究は歯科受診状況を医療費レセプトデータから把握している点において独創性がある。歯科受診による歯周病の管理が歯の残存に有効である結果は、歯科医療による口腔の健康増進効果を示すものといえる。

研究2は、歯科受診患者のデータをもとに歯の喪失リスクを縦断的に評価している。歯の喪失リスクに関する研究は数多く存在するが、本研究は対象を歯科受診患者に限定しており、歯科受診患者の中でも定期管理を目

的とした歯科受診者は歯の喪失リスクが低く、歯の残存には定期的な歯科医療の利用が効果的であることを示すものである。データ分析手法として、人レベルの要因および歯レベルの要因の階層データを同時に分析できるマルチレベル分析（一般化推定方程式）を用いていることは学術的な観点から興味深い。

研究3では、高齢者における歯数および食べる速さとメタボリックシンドロームとの関連を示している。歯数と食べる速さは、それぞれ単独でメタボリックシンドロームと関連していることが示されているが、本研究はそれらを組み合わせた変数を用いて分析を行っている。その結果、多数歯喪失者でもゆっくり食べている者のメタボリックシンドロームのリスクは高くない。この結果は、多数歯喪失者に対して食べる速さを踏まえた食生活指導を行うことの重要性を示すものであり、保健指導の現場で活用できる内容であるといえる。

研究4は、高齢者における歯周治療の受診と糖尿病との関連を多項ロジスティック分析および重回帰分析により検討している。歯周病と糖尿病は相互に悪影響を及ぼすことが知られているが、本研究は通常行われる歯周状態の評価ではなく、レセプトデータをもとにした歯周治療受療者の糖尿病リスクが有意に低いことを示しており、これまでの研究とは異なる視点から歯周病と糖尿病の関連を示す新規性のある研究である。

研究5および6は、高齢者における歯数と医療費との関連を多項ロジス

ティック回帰分析および一般化線形モデルにより分析し、歯数が少ない者ほど医療費が高く、特に糖尿病医療費や消化器がんの入院医療費、入院日数が有意に高いことを示している。この結果は、多数歯の残存が全身の健康維持に効果的であり、医療費抑制にも繋がることを示すもので、口腔保健による全身の健康増進効果を示す社会的意義のある研究である。

研究7は、高齢者の口腔機能に関連する要因と死亡との関連をCox比例ハザードモデルにより分析している。歯が少ないことや口腔機能低下の要因を重複して持つ者の死亡リスクが高い結果は、口腔の健康維持が長寿に貢献できることを示すものである。

本論文は複数の基盤論文から構成されているが、全体の内容は、歯科医療が口腔や全身の健康維持に有効であること、口腔の健康維持が全身の健康維持に効果的であり医療費の抑制や死亡リスクの軽減にも繋がる可能性があることを示している。これらは、口腔保健・歯科医療が口腔および全身の健康増進に貢献できることを多角的な結果をもとに論理的に示している。また、医療費レセプトデータを広く活用している点において従来の研究と異なる新規性がみられる。本論文は、高齢化が進む我が国の健康問題を解決するための有益な情報を示しており、社会へ貢献できる意義深いものである。また本論文は、学術的に興味深い内容を多く含むものであり、口腔衛生学のみならず関連諸学科に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士(歯学)の学位授与に値するものと判定した。